

## 遊離空腸による高位消化管再建術後の嚥下・発声機能について(食道手術再建)

著者	吉田 貢一, 大村 健二, 角谷 慎一, 戸田 有宣, 新田 佳苗, 大島 正寛, 渡邊 剛
雑誌名	日本消化器外科学会雑誌
巻	37
号	7
ページ	1227-1227
発行年	2004-07-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/3966">http://hdl.handle.net/2297/3966</a>

PPS-2-135

遊離空腸による高位消化管再建術後の嚥下・発声機能について

吉田貢一, 大村健二, 角谷慎一, 戸田有宣, 新田佳苗, 大島正寛, 渡邊 剛

(金沢大学大学院心肺・総合外科)

当科の遊離空腸再建術後患者の嚥下・発声機能を評価し, 治療の改良点の検索を目的とした. 1983年12月から2004年1月の期間に当科で遊離空腸再建術を受けた85例のうち生存が確認されている25例を対象とした. 平均術後観察期間は51.9か月(3—159か月)であった. 術式は端側吻合が20例, 端々吻合4例, 空腸パッチ1例であった. 自覚的嚥下・発声機能をアンケートにより評価した. 解答率は44%であった. 食種は10例(90.9%)がほぼ家族と同様のものを摂取しており, 食べやすい食種は5例(45.5%)が固形物で6例(54.5%)は半固形物であった. 嚥下に関しても全例にほぼつかえ感がなかった. 1回経口量は全例が術前とほぼ変わらなかった. 発声に関しては2例に喉頭が温存されており除外した. 8例(88.9%)は食道発声時にかなりの不都合を感じており, 発声の補助器具では4例に電子喉頭, 1例に気管—グラフトボタンが使用されていた. 嚥下機能では非常に良好な結果が得られた, 一方で, 発声機能に関しては不十分であることが明らかとなり, 今後の治療の改良点が示唆された. 今回の検討では症例が少なく術式別の検討にまで至れなかったことが残念であった.

-----